

希望という語について

—Brontës 姉妹の詩より—

宮川下枝

Brontës 姉妹の詩を見ていると、「希望」という語が屢々用いられていることに気が付く。三人がそれぞれにその言葉をどのように解釈しているのか考えてみたい。

聖書の中には “But now abideth faith, hope, love, these three and the greatest of these is love.”⁽¹⁾ (このように、いつまでも存続するものは信仰と、希望と愛とこの三つである。このうちで最も大いなるものは愛である) とパウロによって説かれているが、Emily もこの希望なる語を人生の一つの大切な要素と考えていたようだ。 *Wuthering Heights* の中で Nelly は次のように述べている。 “One hoped, and other despaired.”⁽²⁾

(一人は希望を持ち、一人は絶望してしまって居りましたから) と Edgar Linton と Hindley Earnshaw の場合を比較し生き方を批判している。立ち直っていった者と自滅した者との差は希望を持っていたかいなかったかに依ると考えていたようである。エミリーの信仰については Edward Chitman は “*The Brontës’ Irish Background*” に於いて、

“Emily’s religion was more that of Shelly than Wesley,”⁽³⁾

(エミリーの信仰はシェレ-的でありウェズレー-の信仰とは異なる。) と述べ、キリスト教的と云うより神秘的なのだと説明しているのが、これは他の人によっても云われている処ではある。

以下詩の中から hope なる言葉を探し出してみたい。題そのものに hope とつけられているエミリーの詩があるから先ずそれを取り上げてみよう。

悲しみに打ちひしがれている時、希望はなかなか全面的には顔をみせてくれぬと彼女は云う。

Vision tradition had long existed in Irish Literature.⁽⁴⁾

(映像化する習慣は早くからアイルランド文学の中にあった。) すべて
のものを Vision 化し、希望も姿をもったものとして表明されている。

Hope

Ellis Bell

(Emily Brontë)

Hope was but a timid friend;
She sat without the grated den,
Watching how my fate would tend,
Even as selfish-hearted men.

She was cruel in her fear;
Through the bars, one dreary day,
I looked out to see her there,
And she turned her face away !

Like a false guard, false watch keeping,
Still, in strife, she whispered peace;
She would sing while I was weeping,
If I listened, she would cease.

False she was, and unrelenting;
When my last joys strewed the ground,
Even Sorrow saw, repenting,
Those sad relics scattered round;

Hope, whose whisper would have given
Balm to all my frenzied pain,
Stretched her wings, and soared to heaven,
Went, and ne'er returned again !

p. 82

(下線：筆者)

(希望は唯の臆病者の友に過ぎぬ
鉄格子のほら穴の外で
私の運命がどうなるか見ているだけ。
利個主義な人みたいに。

ある陰鬱な日、格子のすき間から
彼女（希望）がそこにいるのが見えたが、
彼女は恐れて残酷にも
私から顔を、そむけてしまった。

にせものの看守のように、にせの見張りを続け、
苦勞し乍ら私に平和を囁いてくれた。
私が泣いていると、歌い続けてくれるが
耳を聳てると、歌うのを止めてしまう。

希望はうそつき、そして敵しい。
私の最後の喜びが地にまき散らされた時、
悲しみでさえ、この地上のあわれな残骸を見て、残念に思ってくれる。

私の狂乱した痛みに対し、
希望はささやき声でもって
慰さめを与えてくれるであろうに。
羽根を拡げ、天高くとんでゆき、
二度とは戻って来なかった。)

At the root of their attitude seems to have been intense aural
and visual imagination.⁽⁵⁾

(彼等の態度の根底には聴覚的、視覚的な強烈な幻影があるようだ)と
Chitman は述べているが総べてを想像して Vision 化してしまう。この擬

人化する点では妹 Anne も同じで Anne の Fluctuation という詩の中には、希望はやさしい月の姿をもって表明されている。

FIUCTUATIONS

Acton Bell

(Anne Brontë)

What though the Sun had left my sky;

To save me from despair.

The blessed Moon arose on high,

And shone serenely there.

I watched her, with a tearful gaze,

Rise slowly o'er the hill,

While through the dim horizon's haze

Her light gleamed faint and chill.

I thought such wan and lifeless beams

Could ne'er my heart repay,

For the bright sun's most transient gleams

That cheered me through the day.

p. 164

(太陽が私の空から去ってしまっても大丈夫。

恵み深い月が空高く昇り

月が穏やかに輝いて

私を絶望から救ってくれるのだから。

丘の上へゆっくり、月が

かすかな地平線上のもやの中を昇るのを

眼に涙して、じっと見つめていた。

月の光はかすかに澄んで輝いていた。

あのような弱々しい力もない輝きが

私の心を償ってくれるのかしらと思った。

昼の間私を元気づけてくれた
太陽の輝かしい最も束の間の輝きに代って。

Thick vapours snatched her from my sight,
And I was darkling left,
All in the cold and gloomy night,
Of light and *hope* bereft,

p. 164

(厚い霧がかかり月の光をさらつてしまい
私は暗やみの中に残された。
冷い夜の暗闇の中に
私は光からも希望からもとり残されてしまった。)

And darker, drearier fell the night
Upon my spirit then;—
But what is that faint struggling light ?
Is it the Moon again ?

Kind Heaven ! increase that silvery gleam,
And bid these clouds depart,
And let her soft celestial beam
Restore my fainting heart !

p. 165

(私の上にもっと暗くわびしく
夜が降りて来た。
でもあそこにもがいているかすかな光は何あに？
又月が出るのかしら？

やさしい天よ。その銀色の光を増して下さい。
その雲に命じ追っ払って下さい。
私の気を失いそうな心を
月の天の輝き、やさしい光で回復して下さい。)

エミリーにとってもアンにとっても、暗闇に閉ざれた心からは希望は捉え難い逃げ易いもの感じられている。どちらも希望を姿あるもの感じていることは興味深い。

Pleasure, Experience, Doubt, Hope. そうした言葉がすべて象徴化され大文字で書かれている点に於いては妹 Anne も Emily と同じである。

これは父 Patrick Brontë が子供達に Ireland の Fairy Tales を眼を輝して話してくれたというその結果なのであろう。すべてが象徴化して話される時、子供達にはよろこびも経験も疑も希望もすべて活けるものとして映ったのであろう。

Charlotte に於いても Fame, Wealth など大文字で書かれているから幼い子供達には同じように考えられたのであろう。

That *Hope* was all a dream (希望はすべて夢であった) と絶望し乍らも矢張りアンは

To memory and *hope* will cling (思い出と希望にすがりついて生きてゆく) 詩をかいている。

だが最後の希望するところは死の世界のあなたに横わる永遠の世界を望むことに於いてはアンもエミリーに変らぬものを持っている。これについては Chitman は、これも Ireland 的だと考えているのである。

the richness of the folk-artistic background of the Irish Brontës.⁽⁶⁾

(アイルランド生れの父のもつ民話的背景の豊かさ) 希望はなかなか歓びを与えては呉れぬが、それでもすべての苦悩を静かに耐えぬいて死の向うにある平和な安息を得ようとするアンと死の屍の中から永遠がとび出すのだというエミリーとでは生きる力が異なるのである。Death というエミリーの詩を見てみよう。

Deah

Little mourned I for the parted gladness,
For the vacant nest and silent song—
Hope was there, and laughed me out of sadness;

(もう過ぎ去った喜びに対して、
又巢から鳥も居なくなり歌声はきこえぬが
私は少しも歎かない。

希望があるのだもの、
悲しみの中から笑って私に囁いてくれる。

「ぢきに冬は逝ってしまうよ」と)

エミリーにとって希望とは、しっかりとそこに根を下ろし悲しみに沈む
自分に「大丈夫だよ。冬はぢき終るよ。」と力づけてくれる心強い存在な
のである。

And behold ! with tenfold increase blessing,
Spring adorned the beauty-burdened spray;
Wind and rain and fervent heat, caressing,
Lavished glory on that second May !

p. 128

(御覧、十倍もの祝福をもち、
春が来て、その美しさをまき散らし
あたりを飾りたてる。

雨も風も日も惜しみもなく栄光を
五月に降り注ぐ。いとをしみつつ。)

希望が教えてくれた通り、春は確実にやって来て恩恵を降り注いでくれ
た。このエミリーの確信に満ちた受けとめ方は、歎びに浸りこめぬアンと
は大いに異なるのである。エミリーは更に続ける。

High it rose—no winged grief could sweep it;
Sin was scared to distance with its shine;
Love, and its own life, had power to keep it
From all wrong—from every blight but thine !

p. 128

(希望は高く舞い上った。

悲しみに羽根があったとしても、
それを払いおとす事は出来なかった。
希望の輝きの為に罪は恐れて遠く逃げた。
愛と希望は力を持ち
総べての悪から守り続けるだけの力があった。
悉くの害虫から守ってくれた。
あなた以外の。)

Cruel Death ! The young leaves droop and languish;
Evening's gentle air may still restore—
No ! the mornig sunshine mocks my anguish—
Time, for me, must never blossom more !

p. 129

(残酷な死よ。若葉はしをれ枯れても
夜の静かな風が生きかえらせてくれるだろう。
いや、朝日の光は、私の苦悩をあざ笑う。
時は私にとって二度と花咲かぬよ、と)

Strike it down, that other boughs may flourish
Where that perished sapling used to be;
Thus, at least, its mouldering corpse will nourish
That from which it sprung—Eternity.

p. 129

(打ち落とせ、樹液のもとあった処には
他の枝が栄える為に。
枯れ果てる死骸はそこから跳り上るものの滋養となるだろう。
永遠という、そこから立ち上るものへ。)

木々のくち果てて屍となった中から培われて永遠が立ち上るとのエミリーの信念である。

すべてを押しおのけ、はねのけ、生きてゆこうとする迫力に溢れ、たとえ最後に来るものが死であろうと、そこから立ち上るものは永遠というもの

なのである。エミリーの態度には David Cecil も評するように若鷲のような雄々しさがある。

There is nothing cloistered about her imagination. It roves over the world as fearless and unconfined as the young eagle, and it has the young eagle's unspoilt, unhesitating zestful responsiveness to life.⁽⁷⁾

(彼女の想像力は奔放で、若鷲の如く恐れを知らず、ひるむこともなく歩き廻り、害われぬ、ためらいもない人生への反応を持っている。)

又 Wilfred Rowland Childe はエミリーを次のように評している。

There was in Emily a fusion of passion and imagination which makes her an essentially greater figure and accounts for the extraordinary character of her poetry.⁽⁸⁾

(エミリーには情熱と想像力が溶け合っていて、根本的に姉や妹より傑れている。詩に対しては非凡な性格を有することの説明となる。)

更に姉シャーロットは

Of its startling excellence I am deeply convinced.⁽⁹⁾

(妹の詩の驚くべき素晴しさは私も深く納得している。)

Condensed energy, clearness, finish—strange, strong pathos…⁽¹⁰⁾

(凝縮された精力、明晰さ、仕上げ、不思議な力強い哀感)と深く感嘆している。

エミリーの詩を続けてゆこう。

I long to *hope* that all the woe

Creation knows, is held in thee!

Emily

p. 103

(すべての苦悩はあなたによって支えられる事を創造の神は知り給うと私は望みたい。)

And *Hope*—a phantom of the soul; p. 104
(希望よ、魂の幻想よ！)

And am I wrong to worship, where
Faith cannot doubt, nor *hope* despair, p. 119
(信仰を疑うことも出来ず
希望も絶望しないところを
私は礼拝してよろしいでしょうか。)
いろいろな詩の中に希望なる語が見られる。
To *Imagination* なる詩を見よう。

To *Imagination* Emily p. 96
When weary with the long day's care,
And earthly change from pain to pain,
And lost and ready to despair,
Thy kind voice calls me back again :
Oh, my true friend; I am not lone,
While thou canst speak with such a tone!
想像によせて
長い一日の心配ごと、
次々におこるこの世的な違った苦痛で
疲れ切る時
我を失い絶望しかける時
親切な声が再び呼び戻してくれる。
あ、私の親友よ、私は一人ぼっちではないのだ
あなたがそのような調子で
話しかけて下さることの出来る間は。)

外なる世界に絶望することを述べ、憎しみ、疑い等に満ちていることを
嘆くのだが、心の中に輝かしい汚れのない空を抱いていれば大丈夫だ。

そこには千倍もの太陽の光が輝いて呉れるだろう。

と云い、そして最後の節に於いてエミリーは強い信念の持ち主でたとえ一度は絶望しても更にもっと美しい希望が湧くのだと信じている。

Sure solacer of human cares,

And sweeter *hope*, when *hope* despairs!

p. 97

希望は人間の悲しみを必らず慰さめてくれるもの、と云う。

次に Sympathy というエミリーの詩には希望という語こそないが「絶望してはいけない。進め、進め」という進軍ラップをきくような力強い詩なので取り上げてみたい。エミリーが自分自身に言いかけている言葉のようにきこえる。

Sympathy

There should be no despair for you

While nightly stars are burning;

While evening pours its silent dew

And sunshine gilds the morning.

There should be no despair—though tears

May flow down like a river :

Are not the best beloved of years

Around your heart for ever?

They weep, you weep, it must be so;

Winds sigh as you are sighing,

And Winter sheds his grief in snow

Where Autumn's leaves are lying :

Yet, these revive, and from their fate

Your fate cannot be parted,

Then, journey on if not elate,

Still, never broken-hearted!

p. 110

(絶望なんてあってはいけないわ。

夜の星は輝き

夕暮は静かな露を降り注ぎ
太陽の光は朝を色どっている間はね。
涙は川のように流れ落ちて、
絶望してはいけないわ。
あなたの心のまわりには何時も
最愛の月日があるじゃないの？

皆も泣き、あなたも泣いている
あなたがため息をついているように
風も嘆息している。秋の枯葉の散り敷いている処に。
冬は雪となって悲嘆の涙を流します。
でも、これらは甦り、彼等の運命と
あなたの運命は別れることはないのよ。
たとえ、大得意になれぬとしても、
気を落さずに進みなさい。

さて力強いエミリーの *The Prisoner* なる詩の中の希望とはどのような
ものであろうか？

He comes with western winds. 力に溢れる line であるが、どのような状
況なのであろうか。牢の中に閉じこめられた囚人は監守の足音をきき乍ら
自由になれる日を待ち望んでいる。

The Prisoner

Still, let my tyrants know, I am not doomed to wear
Year after year in gloom, and desolate despair;
A messenger of *Hope*, comes every night to me,
And offers for short life, eternal liberty.

p. 78

(私の暴君に知らせてやりましょう。
私は来る年も来る年も、この陰惨な
わびしい絶望の中ですり切れてしまう
運命ではないのよ。

希望の使者が夜毎私のところに訪れ

この世の短い^{いのち}生命の代りに

永遠の自由を与えてくれるの。

He comes with western winds, with evening's wandering airs,

p.78

そしてその自由に解き放してくれる人は西風に乗ってやって来る。

If Winter comes, can Spring be far behind?⁽¹¹⁾

(西風よ、冬来りなば春遠からじ)と春を待ち望んだ Shelley のように、エミリーは西風に乗ってやって来る解放者を待ち望む。これはエミリーの待望する心の束縛の解かれる日、心の自由を待ち望む声である。小説 *Wuthering Heights* にもエミリーは自由を待ち望む気持を病身のキャサリンに託し次の如く叫んでいる。

Oh, I'm burning! I wish I were out of doors! I wish I were a girl again, half savage and hardy, and free,⁽¹²⁾

(体がかっかとするわ。もう一度戸外に出たい。もう一度あの半分野蛮で強い自由だった少女時代に戻りたいわ。)

the thing that irks me most is this shattered prison, after all.

I'm tired of being enclosed here. I'm wearying to escape into that glorious world,⁽¹³⁾

(私を一番悩ますのはこの健康も害してしまう牢獄よ。もうここに閉じこめられているのは飽々したわ。素晴らしい世界にもう一度遁れたいとうんざりしているの。)

この Prisoner なる詩に於いては、希望という使者を信じるエミリーの強い期待のほどが読者の胸にひびいて来る。

さて Anticipation に於いては次のようにうたう。

Anticipation

How beautiful the earth is still,
To thee—how full of happiness!
How little fraught real ill,
Or unreal phantoms of distress!
How spring can bring thee glory, yet,
And summer with thee to forget
December's sullen time!
Why dost thou hold the treasure fast,
Of youth's delight, when youth is past,
And thou art near thy prime?

p. 56

お前にとって、この世はまだ
何と幸福に溢れ美しいことだろう。
本当の悪にも余り溢れていないし、
困惑の幻想もまだないのだから。
春はお前にはまだ光栄をもたらせるのだし
夏はお前に十二月の陰気な時を
忘れさせる
お前はもう青春も去り
もう成熟に近いというのに、何故お前は
その青春の歓びをしっかりと抱いているのだ?)

青春の間は世の中の真の困難にも遠いことだし、まだまだ歓びに溢れて
いる。年をとっても青春を忘れないでいる自分自身に呼びかけているよう
だ。この幸福な若者が若いままに死ねたら幸福なことだとエミリーは云う。
そしてその次の節に希望という語が来る。

“Because I hoped while they enjoyed,
And, by fulfilment, *hope* destroyed.

p. 57

(彼等が青春を楽しむうちにと、私は望むのだ。

何故なら果してしまへば
希望もこわれるのだから。

幸福に溢れる若者が世の罪に染ることなく人生をわたってくれるように祈るのである。

Remembrance

Emily

に於いては、情熱的な女王 Augustus が死んだ昔の夫の墓の前で嘆く。

Cold in the earth — and the deep snow piled above thee,
Far, far, removed, cold in the dreary grave!
Have I forgot, my only Love, to love thee,
Severed at last by Time's all severing wave?

p. 31

(地の中は冷く、あなたの墓の上には
深く雪が積っています。
こんな離れた所で陰鬱な墓の中で冷たいでしょう。
時の流れに離されてしまっていたけど、
あなたを忘れてしまったなんてお思い？
私の唯一人の愛する方
あなたを愛することを忘れた
なんて事はありません。)

めんめんと思いを述べた後更に続ける。

Sweet Love of youth, forgive, if I forget thee,
While the world's tide is bearing me along;
Other desires and other hopes beset me,
Hope which obscure, but cannot do thee wrong!

Emily p. 32

(若い時のいとしい方。
もし私があなたを忘れたとしたら許して下さい。
世の流れのみが私を支え

外の願い他の希望が私を閉じこめても

希望は薄らいだとしても

あなたを忘れることはありません。)

情熱溢るる女王の言葉の中に希望とはこのように表明されている。

Faith and Despondency に於いてはエミリーは墓の中に眠る人達に思いを馳せ「死んでしまつて何と無益な人生だろう。」と思うが「いや違う、あの人達は恵みの岸に行きついたので悲しくはないのだ」と思い返す。「そこは私共の生れた所だし一番親しい人達にも逢えるところだ。」苦悩からも墮落からも自由になれて神聖なる神に逢えるのだ。」次に希望なる語が出て来る。

Faith and Despondency

Emily

Thy fervent *hope*, through storm and foam,

Through wind and ocean's roar,

To reach, at last, the eternal home,

The steadfast, changeless, shore!"

p. 10

(あなたの熱烈な希望は嵐波の中を

風、大海原の唸りの中を抜け

遂には永遠の家、安定した変ることない岸に着くことなのよ。)

とこの詩を咏んでいるが、これは取りも直さずエミリー自身の熱烈な希望なのである。

では次に Anne の詩から *hope* という言葉を探してみよう。

If This Be All

Anne

O God! if this indeed be all

That Life can show to me,

If on my aching brow may fall

No freshing dew from thee,—

If with no brighter light than this
The lamp of *hope* may glow,
And I may only dream of bless,
And wake to weary woe;

p. 80

(ああ、神さま、これが人生が私に
示してくれる総べてであるにしろ、
私のひそめた額に、あなたからの
元気づけの露が下りなくても、

もし、これ以上明るい光が射さなくとも
希望の光が輝きさえすれば
祝福を夢みることは出来るだろう。
目覚めれば、うっとうしい苦悩だけにしろ。)

たとえ人生が心配事だけにしろ、頑張ると言っている。
健気なアンの祈りである。希望の光は僅かでも、それに依って耐えられ
るようにと、祈り続ける。

If Life must be so full of care,
Then call me soon to Thee;
Or give me strength enough to bear
My load of misery

(たとえ人生が心配ごとに満ちていても。
だったら神さま、
あなたのみ許に早くお呼び下さい。
それとも人生の重荷を
耐えるだけの力を下さい。)

アンの詩は次のように評されている。

The poetry of Anne, though not of the first rank, is much better than

Charlotte's because it expresses a more direct and immediate feeling, a quality of simplicity and humility. There is a strong note of genuine pathos. Anne wrote poetry as a bird sings,⁽¹⁴⁾

(アンの詩は、第一級と迄はいかずとも、シャーロットのよりずっとよろしい。何故ならもっと直戴な当面の感情を表明しているからである。単純で謙虚な感情を出している。真実な哀感の強い調子があり、アンは小鳥の歌う如くに詩を書いている。)

始めの頃の Anne の詩は、キリスト教の信徒としての深い信仰に溢れ、希望に満ちたものだった。故にその頃の希望なる語も活々としている。

The Doubter's Prayer

If I believe that Jesus died,
And, waking, rose to reign above;
Then surely Sorrow, Sin, and Pride,
Must yield to Peace, and *Hope*, and Love.

p. 99

(もしイエスが亡くなられても
甦り天高く統すべ給うことを信じるなら
必らずや悲しみ、罪、誇りは、
平和、希望、愛に道を譲るに違いない。)

While Faith is with me, I am blest,

p. 98

(信仰がある限り、私は祝福されている。)と信じこみ、心も慰さめられている。

次の詩も明るい希望を描いた詩である。

A Word to the "Elect"

And, oh! there lives within my heart
A hope, long nursed by me;

(And, should its cheering ray depart,
How dark my soul would be!)

p. 106

(おお、私の胸のうちには
長い間胸に育んで来た希望がある
その希望が明るい光を投げかけてくれなくなったら
私の魂はどのように暗くなるだろう。)
すべてを希望に託している。そしてキリストの償いを信じる信仰深いア
ンらしい詩である。

What shall I do, if all my love,
My *hope*, my toil, are cast away,
And if there be no God above,
To hear and bless me when I pray?

p. 98

(だが私の愛も希望も骨折りも
すべて投げ捨てられたらどうしよう？
天に神がいらっしゃらなくなったら
私の祈をきき、私を祝福して下さる神が
いらっしゃらなくなったらどうしよう？)

アンは純粋な歓びを失って、除々に人生の絶望へと移ってゆき、希望も
手の届かぬものとなっていってしまうのである。

アンの詩の中では希望は除々に色あせたものとして *The Blasted Hopes*
(だいなしになった希望として) 喜びを与えてくれるものではなくなって
ゆく。

Views of Life

Anne

Oh, Youth may listen patiently,
While sad Experience tells her tale;
but Doubt sits smiling in his eye,
For ardent *Hope* will still prevail!

p. 132

(若者は辛抱強くきき

悲しい経験は自分の経験を話しても
熱心な希望がまだ掩っているのだから
若者は眼に疑いをもって
微笑みつつきいている。

そして、若者は悲しい経験の物語は信用せず、大人になれば楽しいこともあると来る日も来る日も自分の成長を待ち続けたが、実際には、日も照らず太陽も滅多に射さぬ苦しい人生であった。アンはこの世への希望を捨てる詩が多くなってゆく、この世には休息はないと考え出す。

Tell him, that earth is not our rest!
Its joys are empty — frail at best;
And point beyond the sky,

p. 134

(この世は我々の休息場所ではない。
この世の喜びなんて空虚で
せいぜい、はかないもの。
空を指してごらんと若者に教えなさい。)
更にこの節は続く。

But gleams of light may reach us here;
And *hope* the roughest path can cheer:
Then do not bid it fly!

p. 135

(微かな光でも我々のところへ届くだろう。そして最も険しい道でさえ
元気づけられると望む事が出来るだろう。
だから飛んで行かぬように命じて!)

Though *hope* may promise joys, that still
Unkindly time will ne'er fulfil;

p. 135

(希望は喜びを約束しても矢張り
不親切にも時はその約束を果してくれぬ。)

希望は約束されても実際には幻滅のみを味ってゆく。

Yet *hope* itself a brightness throws
O'er all our labours and our woes;

p. 135

(だが希望そのものは
我々のすべての骨折り、歎きの上に
光を投げかけてくれる。)
人生に失望し乍らもなお希望にすがりついて生きてゆこうとする。

He turns to *Hope*
and she replies,

p. 132

(希望に顔を向ければ、
彼女は答えてくれる)

とのアンの信念の程が *Views of life* に於いて記されている。この詩は
非常に長い詩であるが希望なる言葉も多く用いられている。

現在の苦悩の中から何とか希望に身を託したいというアンの切なる願は
Appeal という詩によく現われている。

APPEAL

Anne

Oh, I am very weary,
Though tears no longer flow;
My eyes are tired of weeping,
My heart is sick of woe;
My life is very lonely,
My days pass heavily,
I am weary of repining,
Wilt thou not come to me?

Oh, didst thou know my longings

For thee, from day to day,
My *hopes*, so often blighted,
Thou wouldst not thus delay!

p. 140

(もう恐れはないけれど
とても疲れきったわ、
眼は泣き飽きたし、
心は、苦悩にうんざりしている。)

私の人生は淋しく
私の日々は重苦しく過ぎてゆく、
もう不平をいうのにもあきあきしたわ
あなたは来て下さらないの？

日々のあなたへの私の憧れを御存知なら
私の希望も屢々こわれてしまうのだけど
希望さん、そんなに遅れずに来て下さいな。)
この世に絶望したアンにとって慰さめは死の彼岸にある天国であった。

I know thre is, though far away,
A home where heart and soul may rest.

Warm hands are there, that, clasped in mine,
The warmer heart will not belie;
While mirth, and truth, and friendship shine
In smiling lip and earnest eye.

The ice that gather round my heart
May there be thawed;

p. 120

(遙か遠くに、心も魂も休めることの出来る
家があることを知っている。
暖い手が、そこでは私の手を握ってくれる。)

より暖い心は私をあざむくことはない。

楽しみも、真実も友情も

笑いつつ熱心な眼で迎え輝いてくれる。

私の心のまわりに凍りついた氷も

溶けるだろう。)

だがそれは永遠の休息の地、死の彼方の世界なのであって、この世には彼女には歓びはない。

アンにとって、希望とは天国の家で慰さめられることなのである。

Though far I roam, that thought shall be

My *hope*, my comfort, everywhere,

While such a home remains to me

My heart shall never know despair!

p. 121

(たとえ、どのように遠くさまようとも、

そのような家がある限り

私の希望、私の慰さめは何処にもあり

私の心は絶望を知らないのである。)

The Consolation (慰さめ) の一節である。

姉シャーロットが一番最後になってしまった。この人は二人の妹に比べれば *hope* という言葉の用い方は少いようである。又二人の妹が死後の世界での永遠の愛、永遠の平和を考え望んでいるのに対し、そのような考え方は見られない。彼女は愛されることのみ最大の幸と考える。

先ず *Pilate's Wife's Dream* から見てみよう。

欧州ではピラトの一言によってキリストは十字架にかけられ給うた、との考え方がゆき亘っている。又ピラト自身も職務柄とは云え十字架にかけられることを大衆の前で許した事を大いに悔みその悩める霊はスイスの山で迎えられたと云い伝えられている。ピラトス山という。そのピラトの妻が彼

女は信心深い人であったが故に夫の行為を非常に憎む。シャーロットは悩めるピラトスの妻になり切って詩を書いている。神の子キリストが十字架につけられ給うことを知り夜も眠れぬ程に心配する。そして最後に次のように述べるのである。

Pilate's Wife's Dream

Curre Bell

(Charlotte Brontë)

I wait in *hope*—I wait in solemn fear,
The oracle of God—the sole—true God—to hear.

(私は希望をもって待とう、厳そかな畏れのうちに待とう。
神のお告げのきけることを、
唯一の真実なるお告げをきくことを。
の中に希望なる言葉を用いている。

Frances の中でも *hope* という語が出る。女主人公は眠れぬままに不安のうちに夜の庭を足早に歩き廻る。絹ずれの音がする。

Frances

Charlotte

“Unloved—I love; unwept—I wept;
Grief I restrain—hope I repress.
Vain is this anguish—fixed and deep;
Vainer, desires and dreams of bliss.

p. 49

(私は愛されていないのに、私は愛している。
泣いても貰えないのに、私は泣いている。
私は悲しみを抑えている。
希望をも抑えている。
この苦悩もむなしく、頑として深い。
祝福を夢みても願っても
更にむなしいことだ。)

My love awakes no love again,

My tears collect, and fall unfelt;
My sorrow touches none with pain,
My humble *hopes* to nothing melt.

p. 49

(私の愛は相手の愛を再び目覚めさせることは出来ぬ
私は涙をため、流しても
感じてもらうことは出来ぬ。
私の悲しみは誰にも苦痛を与えることは出来ず
私の謙虚な希望も何ものをも溶かすことは出来ぬ。)
自分の愛が相手に通じないことのみを歎く。

False thought,—false *hope*,—in scorn be banished!
I am not loved, nor loved have been,
.....

p. 56

(虚偽のおもいよ、にせの希望よ、
そんなものは追放されてしまえ、
私は愛されてもいないし、
愛されてもいなかったのだ。)

.....

I ask for solace—*hope* for aid.

p. 56

(ああ慰さめを下さい。
助けられるという希望を下さい。)
切実に愛されることへのシャーロットの切実な訴えが叫ばれている。
又次のような詩もある。

STANZAS

And well my dying hour were blest,
If life's expiring breath
Should pass, as thy lips gently prest
My forehead, cold in death;

And sound my sleep would be, and sweet,
Beneath the churchyard tree,
If sometimes in thy heart should beat
One pulse, still true to me.

p. 127

(いのちの息の果てる時、
もしもあなたの唇が私の額に
やさしく押しつけられるならば
私の死の時も祝福されている。
教会墓地の木の下に死んで冷くなっているも、
私の眠りは安らかに美しいものだ。
時々あなたの心臓に一打ちでも
矢張り私に対して真実の脈が打たれるなら。)

この激しい愛されたい希望については Wilfred Rowland Childe は The Brontë Parsonage Museum に於いて次のように述べる。

In Charlotte's case the dichotomy of soul is marked. Her genius taught her the place of passion in life, but in actual life she was repressed and almost respectable.⁽¹⁵⁾

(シャーロットの場合は、精神の二分性が著しい。彼女はその非凡な才能により愛の場をうたうのだが、実生活に於いては控え目でお上品なのである。)

故にシャーロットの描くどぎつい迄の愛の場面、又愛の願望は彼女の想像のみに依るものなのであろう。

シャーロットは二人の妹とは異り死後の世界に対しては疑い深い。

Oh! leaving disappointment here,
Will man find *hope* on yonder coast?
Hope, which, on earth, shines never clear,
And oft in clouds is wholly lost.

p. 50

(おお人はここに絶望を残して
向う岸に希望を見出すのだろうか？ この世では希望というものは決してはっきりとは輝かない。
そして屢々雲の中にすっかり見失われてしまう。)

Will he *hope's* source of light behold.

p. 50

(彼はそこに生命の希望の根源を見出せるのだろうか？)

The Teacher's Monologue

— so void and lone

Is Life and Earth—so worse than vain,
The *hopes* that, in my own heart sown,
And cherished by such sun and rain
As Joy and transient Sorrow shed,
Have ripened to a harvest there;
Alas! methinks I hear it said
“Thy golden sheaves are empty air.”

p. 108

(この人生も地上も空虚で淋しいもの
むなしいよりもっと悪い、
私の心の中にまかれた希望
それは太陽や雨に培われ、
収穫迄に、みのって来た
よろこびや束の間の悲しみのように、
でもそれはこう云っているように思える
金色の束もからっぽだったのよ。)

To toil, to think, to long, to grieve,—
Is such my future fate?
The morn was dreary, must the eve

Be also desolate?

Well, such a life at least makes Death

A welcome, wished-for friend;

p. 110

(苦勞し、考え、待ち望み、そして歎くことが
私の未来の運命なのかしら？

朝が侘びしいものなら

夕暮だってみじめなものに違ひ。

いいわ、そんな人生ならともかくにも

死こそが歓迎すべき

待ち望む友なのだ。)

シャーロットにしては珍しく人生の明るい見方をした詩がある。勇気に溢れているのでそれを引用しよう。

Life

Charlotte

Life, believe, is not a dream

So dark as sages say,

Oft a little morning rain

Foretells a pleasant day.

Sometimes there are clouds of gloom,

But these are transient all;

If the shower will make the roses bloom,

O why lament its fall?

Rapidly merrily,

Life's sunny hours flit by,

Gratefully, cheerily,

Enjoy them as they fly!

What though Death at times steps in,

And calls our Best away?

What thou sorrow seems to win,

O'er *hope*, a heavy sway?
Yet *hope* again elastic springs,
Unconquered, though she fell;
Still buoyant are her golden wings,
Still strong to bear us well.
Manfully, fearlessly
The day of trial bear,
For gloriously, victoriously,
Can courage quell despair!

p. 82

(人生は賢者が云うような
暗い夢ではないことを信じなさい。
屢々朝の小雨は
楽しい昼間を予告してくれる。
時には暗い雲も掩うけど
それは束の間のもの、もし俄雨がばらの花を咲かせてくれるのなら、
雨を何故嘆くの？
楽しく快く人生の楽しい時は過ぎてゆく。
過ぎゆくがままに感謝して明るく
それらを楽しみなさい。

時に死が踏みこみ
我々の最上のものを連れ去り
希望の上に悲しみがどっしりと
勝利を得たように見えても
しかし希望は弾力のあるバネのように
倒れても征服されることはない。
彼女の金色の羽根はまだ元気よく
私共を運んでくれる程大夫だ。
男らしく恐れなく
試練の日を耐えて

勇気は輝かしく華々しく

絶望を沈めそれに打ち勝つことが出来るのだから。

だが、シャーロットは、詩の中に於いてではなく、実生活に於いて心の底から希望を下さいと切実に祈ったことがある。愛する妹エミリー、頼りにしていたエミリーが医者に診て貰うことも拒み薬もよせつけないで雄々しくも死んでいった時のことである。絶望してはいけないと必死に自分に言いかせるような訴えの手紙を引用して終りとしたい。親友エレン・ナッシーにおくったものである。

“I *hope* still——for I must *hope*,” wrote Charlotte——“for she is dear to me as life——if I let the faintness of despair reach my heart I shall be worthless,……”⁽¹⁶⁾

(私は失張り希望を持ちたいの。いや持たねばなりません。何故なら妹エミリーは私には命のように大事です。もし私がほんの少しの絶望でも心に感じたら、私は価値もない人間になります。……)

注

(I) 詩はすべて *Brontës Poems* に依る。

The Early Work of Charlotte, Emily and Anne Brontë

(Mark, R. D. Seaward, E. P. Publishing Limited Introduction)

(II)

1. The Bible (I Corinthians 13…13)
2. Emily Brontë: *Wuthering Heights* (研究社) p.209
3. Edward Chitman: *The Brontës's Irish Background* p.70
(The Macmillan Press)
4. Edward Chitman: *The Brontës's Irish Background* p.81
(The Macmillan Press)
5. Edward Chitman: *The Brontës's Irish Background* p.96
(The Macmillan Press)
6. Edward Chitman: *The Brontës's Irish Background* p.135
(The Macmillan Press)
7. David Cecil: *Emily Brontë Wuthering Heights* p.35
(A Wuthering Heights Handbook) The Odyssey Press.

-
8. Wilfred Rowland Childe. *The Brontë Parsonage Museum* p.20
(The Council of the Brontë Society)
 9. Virginia Moore. *The Life and Eager Death of Emily Brontë* p.347
(Haskell House Publishers Ltd.)
 10. Virginia Moore. *The Life and Eager Death of Emily Brontë* p.347
(Haskell House Publishers Ltd.)
 11. Percy Bysshe Shelley. "Ode to the West Wind" p.463
English Prose and Poetry (Ginn and Company)
 12. *Wuthering Heights* Chapt. XII. p.142
 13. *Wuthering Heights* Chapt. XV. p.182
 14. *The Brontë Parsonage Museum* p.21
 15. *The Brontë Parsonage Museum* p.21
 16. *The Life and Eager Death of Emily Brontë* p.358
- (Ⅲ) hope, 希望の語の下線はすべて筆者。